



〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42 カトリック鹿兒島司教区 電話099(226)5100 振込口座 02030-2-8359 編集発行 教区広報部 1部60円年間千共1100円

道標



Yet... Joy! Hope! Gratitude!

人が集う教会目指す二期工事開始

名瀬聖心教会聖堂改修工事竣工感謝ミサ

名瀬聖心教会(永山幸弘神父)は8月27日(日)、聖堂改修工事竣工感謝ミサをささげた。同工事は、同教会献堂50周年(2015年)を契機とし昨年、着手。竣工にあたり、郡山健次郎司教が同ミサを司式した。郡山司教は説教で「改修工事は一期工事。これからは教会の二期工事、新しい始まり。皆が祈り、癒され、帰る場にしてほしい」と訴えた。



①床も天井も整備された聖堂
②300人余りの信徒が集まってきた感謝ミサ

現在の名瀬聖心教会聖堂は、戦時中に空襲で崩壊した「レンガみどり」、名瀬大火(1955年)で焼失した木造聖堂に次ぐ三代目で1965年に献堂された。2015年の献堂50周年を契機として昨年、改修工事に着手。老朽化した鐘楼、化粧紙の剥落した天井、所々に亀裂のあった床等を改修した。竣工にあたり、同教会で

は新装なった聖堂で感謝ミサを挙行。郡山健次郎司教が司式した。郡山司教は説教で、改修工事に関係した多くの人々に感謝を述べるとともに、「改修工事は一期工事。これから教会の二期工事。新しい始まり」と発話。「祈り」の意をその漢字のつくりから「神に近づくこと」と説き、「きょう、ここにいない仲間たちを

忘れないでほしい。彼らのために祈ってほしい」と呼びかけた。また司教は、「神さまに呼ばれた者の集いが教会。新しくなった御聖堂に、教会を回復してほしい」と語り、「ここを(ここにいない仲間たちも含む教会の)皆が祈り、癒され、帰る場にしてほしい」と訴えた。感謝の祭儀の後、竣工式

では、同教会の礎山誠信徒総代が挨拶。支援者や関係者に

ベトナム人修道女が感動の誓い

聖血礼拝会で終生誓願式

聖血礼拝修道会は8月17日、霧島市溝辺町の同修道会聖ヨゼフ修道院で終生誓願式を行った。誓願宣立者はベトナムから来日して8年になるシスターマリア・ヨハンナ・ドアン・レ・バオ・フーンさん。郡山健次郎司教が司式し、シスター・マリア・ヨハンナは涙声で誓願を宣立した。



終生誓願を宣立したシスター、マリア・ヨハンナ・ドアン・レ・バオ・フーンさんは2009年、志願者として来日した。志願期1年、修練期2年、有期誓願2年、さらに同3年を経て、このたび終生誓願となった。

平和の鐘を鳴らそう

8月15日(火)ザビエル教会で「平和の鐘を鳴らそう」があった。この催しは、教区と鹿兒島ユネスコ協会が協力して、終戦記念日の8月15日に実施してきたもの。これまではザビエル祭の中で実施されてきたが、同記念祭開催日の変更となつたため、今年は一平和の鐘を鳴らそう」単独での実施となった。

誓願式では、シスター・マリア・ヨハンナが祭壇前に着席した郡山司教の前に

感謝を述べ、改修工事の概要を報告。「工事を終え、さらに前へ、未来へ進んでいきたい」と話した。この日のミサには司教のほか、教区司祭5人と修道会司祭1人が駆けつけ、聖堂は300人余りの会衆であふれた。ミサの後、聖堂に隣接するカトリックセンターでは茶話会。改修を祝う多くの人で賑わった。

平成29年度 日本カトリック老人施設協会 九州支部施設長会・職員研修会

開催：10月12日(木)～13日(金)
(1)12日(木) サンロイヤルホテル
・記念講演と交流会
(2)13日(金) ザビエル教会
・記念講演(9:00～10:00)
講師：小隈憲士神父 演題：「かわりを生きる」－眼差しの先にもう一人の私を見る－
・派遣ミサ(10:20～11:20)
司式：頭島 光神父

※ザビエル教会での記念講演、派遣ミサはどなたでも出席できます。

110人余が学習 今年の信仰養成講座

「信仰の基礎養成の機会にしたい」との目的で始められた夏期集中講座が今年8月21日(月)から25日(金)までザビエル教会ホールであった。26回目となった今年の講座のテーマは「私たちは信仰宣言で何を表明するのか」。永年この講座を担当している講師の竹山昭神父(ザビエル教会)から熱心に学んだ。

1日に二度(昼と夜)同じテーマで開かれた今年の講座には、鹿兒島市内を中心に110人余りが参加した。

▼池上さん祭壇奉仕者に 徳之島教会の終身助祭候補・池上利男さんが9月17日、ザビエル教会での主日のミサの中で祭壇奉仕者に選任された。

短信



わたしの読書



新刊詩集 徳重敏寛著

「永遠の港に向かつて」

紫原教会 山下和実

詩人・徳重敏寛（谷山教会）の四冊目の詩集「永遠の港に向かつて」が発刊された。21章に分けられ、967編の詩が収められている。一つひとつの詩をゆくりと読んでいくと、不思議な世界に吸い込まれていく。

国語教師として徳重敏寛先生との最初の出会いがあった。サン・テグジュペリや小林秀雄の文庫本、宮沢賢治、斎藤茂吉の詩歌プリントを使っての授業、生徒達の自由な発言が許される授業は、受験勉強から逃避していた我々にとって、解放感を味わえる時間であり、教室は解放された空間であった。多くの詩人、歌人、作家を教えてもらい、文学や思想への眼を開かせてもらった。その後、第一詩集（「徳重敏寛詩集」1980年）が発行され、それを讀んだ時、初めて先生が詩人であることを知った。さらに、カトリックの信仰を持つキリスト者であることもわかった。高校時代の「謎」がとけてきたような気がした。今では教師・詩人・信仰者の三者は別々ではないと理解している。これについて、先生から「それは当たり前のことじゃないかな」と言われ、うなづかす。神の前に自分を捧げているかぎり、信仰と職業を使い分けることはできないからだ。詩人であり、教師でもある根底には神への深い信頼があることは、この詩集からもわかる。ここでは自然、信仰、

教育に関する詩を三編紹介する。

木と永遠（98頁）

木は過去を持たない。／
思い出も持たない。／
その代わり／
永遠を持つ。／
木と共に居て私達もまたそれを持つのだ。

人のために、人と共に（424頁）

神の国のために働く、つて／
どうすれば良いんだろ。／
神の領土を拓けること、／
つて／
言われてもよく判らないんだけど。／
何、／
簡単なことなのか。／
人のために生きる、／
人と共に生きる、／
それだけで／
神の国を拓けるために生きていく。／
神と人とに仕える、／
そこに神は居られるのだから。／
鏡 教室にて（453頁）
鏡に美しい物が映らなかつたとしても／
それが鏡の責任だろうか。／
自分の映っている鏡／
それがあの子達。／
子ども達の顔に苛立つていた私を見て恥ずかしくなつた。

この他にも、若い、自然、信仰生活などを平易に深く表現した作品が収められていく。この詩集を通して、日々の生活と信仰を振り返ることができたことを感謝している。なお本書の巻末には先生の教え子である中村昇氏が詩人の思想を詳細に解説している。

（「永遠の港に向かつて」徳重敏寛詩集）発行所 株式会社トライ社 2017年8月1日発行 定価2700円 ザビエル書院 ジュンク堂で販売

3月11日（金） 廿日市ー岩国：約25km

午前6時40分、朝ミサのため、アンリ神父と共に福音の光修道院へ。

帰路、「シスターたちが喜んでくれたね」とアンリ神父。たしかに、修道院のエントランスまでわざわざ出たシスターは、「きょう、この下を通りますね。お祈りしています」と励まし、見送ってくれた。

「この下」とは、海沿いの、国道2号線のこと。だからというわけでもないが、経路は国道2号線を選択、午前9時に発つ。これには安芸の宮島（特に、厳島神社）を一目見たいとの心もあざかってのことである。

はるかに、海に浮かんだ朱い鳥居を目にしたとき、正直、心うたれた。やはり平家は驕った一門でもなければ、清盛は極悪非道の人でもない、と直感した。雅やかで、趣味のよい、また信仰にも篤い人びとであったにちがいない。でなければ、このような美しい景観を想い企て、実現できようはずもない。

「平家物語」、「源平盛衰記」、「吾妻鏡」など、当時を記録した文書はいずれもが後世、勝者である源氏の側から書かれた。敗者



厳島神社

である平家は、悪者に仕立てられたにすぎない。また「平家物語」の冒頭の今様風の哀調が、諸行無常だの盛者必衰の理だの、月並みな託宣が、多くの人びとを誤らせたことはこの美観に一目瞭然である。

まるで（口絵写真でしか目にしたことはないが）平家納経「法華経提婆達多品第十二見返」を見るかのよう。その佇まいは、素朴な神への畏敬と浄土極楽を夢見る清盛と平家一門の、古くからというわけでもないが、経路は国道2号線を選択、午前9時に発つ。これには安芸の宮島（特に、厳島神社）を一目見たいとの心もあざかってのことである。

諏訪勝郎神学生の「僕の長崎への道」

日本二十六聖人の道を歩いて (13)

3月11日。廿日市教会を出るとき、アンリ神父が「多くの亡くなられた方々への祈りとともに、きょうは歩くのだね」と僕のTシャツを見て言った。「2011・3・11 Always be with you」と書いてあった。

あれから5年。きのうの朝刊では、高原原発停止の判決が一面に。画期的な判決である一方、川内原発は再稼働、復興のかけ声は勇ましいけれど、電力のみならず土建屋のさかしらとも結託、人びとの心は置き去りにされたままだ。

基本的な事柄は何ら変わつちやいない。エネルギーの過剰供給を要する僕たちの生活そのものがあらたまらなにかぎり、僕たちの意識自体を変えないかぎり、

置き去りにされた悲しみのあてではない。無念の晴れることはない。

大竹から岩国方面へと海沿いに伸びる工場地帯、そこに林立する煙突の煤煙をながめ、思う。すべてが生産過剰になった現代、すべてが消費に頼り高度な物流機構に依存した現代は、足を知らぬ強迫観念へと僕たちを誘ってやまない。

僕たちの生の様式を画一化、過剰計画化する。人間原初の野生の発揮する場はどうに喪われた。野生は蔑まれ、飼いや馴らされたスマートさが闊歩。実生活のなかで生命そのものはたらしを自らで知ることもない。

不格好にやや足を引きずりながら歩む僕のすがた

色は、傍らを擦過する車上の人にはさぞ滑稽に映るだろう。だが、その一歩一歩が生命のはたらく確かな結果。いま歩む僕の動力は、まぎれもなく僕の「からだ」と「こころ」に尽きる。分を知るとは、差別表現ではない、自戒と自足の心構えだ。

小瀬川を渡る。川は広島と山口の県境。とうとう山口県に入った。午後4時過ぎ、岩国着。

3月12日（土） 岩国ー高森：約27km
午前8時半、岩国を出る。ほぼ今津川に沿い、錦帯橋へ。山頂の岩国城を左手に、その裾野をまわり御床（新岩国駅周辺）へ。御床を過ぎ、左手の山裾に、燻して煤けたような黒

色の木材を横張りにした瀟洒な校舎が。御床中学校。その佇まいは、懐古趣味でなく、いまま純潔な少年少女の感情と夢が、奔放に駆け回っているかである。

それから先、柱野あたり、商業看板のまるでない山村風景が続く。欽明路峠は、この旅で最も急峻な登り坂ではなかったか。峠の尽きた所に、万葉歌碑が。

「周防なる磐國山を越えむ日は手向けよくせよ荒れその道」（大宰府の少典山口忌寸若麻呂）。まほろばの時代の人も息切らして、この峠を越えたのだ。きつと二十六聖人たちも。

旧道を西へ。玖珂の町を行くころ、右脚に痛み。

3月13日（日） 高森ー徳山：約30km
午前10時半ごろ、高森を発つ。島田川の河川敷を行く。岩徳線米川の駅は、傍を歩いていても見過ごされるほどの小舎。米川を過ぎ、しばらく行くと、峠道に。年配のご婦人二人が立ち話をしている。高水への道を探いた。

「だんだらだんだら行く」と高水よ。傾斜はきつくない。但し、長い。行けども尽きぬという感じの登り坂。たしかに「だんだらだんだら」だ。峠の極まったところ。「御駕籠建場」とある。

「ここは昔（藩政時代）藩主や西国の諸大名が参勤や国内巡視などで往來の際駕籠を止めて休息された場所です」（原文ママ）と説明文が。ならば聖人たちもきつと、ここで休んだにちがいない。

高水の集落に入る。しばらく行くと、「吉田松陰・寺嶋忠三郎訣別の地」の碑。寺嶋忠三郎は松下村塾で松陰に学び、蛤御門の変（1864年）で久坂玄瑞とともに自刃した人。松陰が安政の大獄（1859年）に連座、江戸に檻送される際に高水村を通過した。当時同村に住まっていた忠三郎はここで、松陰と無言の別れを交わしたという。幕末の志士の逸話に長州にいる実感も強まるのである。

呼坂本陣跡を過ぎ、国道へ。御床から高水までの道は、これまで歩いたなかで、いちばん良い道と思われる。もちろん、それぞれ区間にそれぞれ良い道はあった。だが、これほど長い距離を良好に保っているところは少ない。なお、ここで言う「良い道」とは、当時に使われるという意味だ。

久保に至り、なるべく交通量の少ない鄙びた道へ道へ、と選択。これを旧道と思い歩んだところ、しばらく行くと岩徳線、山陽新幹線および国道2号線からずいぶん離れてしまっている。と気づいた。地図上の経路とは異なり、川に沿って歩いている。道はやや下り気味。山から平地へと向かっている。道を誤つたらしい。

構わずそのまま歩む。下松に出た。市役所を右折、そのまま西進。雨が。やがて本来の経路へ。午後5時30分、雨足の強まる中、徳山教会着。オレギ神父と中村健三神父が歓迎してくれた。（続く）

司教と一緒に神との関わりを学習

奄美大島で3回目のYOUCCAT

郡山健次郎司教は8月26日(土)、鹿児島教区奄美地区長館で奄美YOUCCAT(カトリック教会の青年向けカテキズム)を行った。テキスト「YOUCCAT(日本語)」を用い、第1部第1章から第2章のうち、五つの設問について講義。集った青年たちは、主に教会の人間観や人間への神の思いを学習、信仰の理解を深めた。

YOUCCATとは、Youth Catechismの略、「カトリック教会の青年向けカテキズム」のこと。1980年代からの、特に青年層の、教会離れを受け、「カトリック教会のカテキズム」(97年)に基づく、若者に親しみやすい教理解説書が求められた。ウィーン大司教の指導の下、編集が進められ2011年、「YOUCCAT」(独語)を発行。13年、邦訳刊行された(翻訳責任者・郡山健次郎司教)。



郡山司教は、テキストに沿い、第1部第1章から第2章のうち、五つの設問について講義。設問1と2をまとめ、「人間は神から出て、神へ帰る」と説き、設問3「わたしたちは、なぜ神を求めたのか?」では、「神へのあこがれ」を聖アウグスティヌスの回心のエピソードを交えて解説した。

また、英語で「人」はpersonと言う。この語が「音(son)による」(per)、「人」と人、人と神とは、響き合う関係性にある」と話した。

さらに設問8「旧約聖書の中で、神はどのようにご自分を示しているのか?」では、ノアの箱舟や出エジプトのエピソードを紹介。拘泥(こだわり)から逃れられない人間のあり方を例に「救い」を説明、「神さまは解放を望んでおられる方」と話した。

この日、司教のほか、高校生を含む7人が参加。講義後の質疑応答では、特に設問4の「理性で、神の存在を知ることが出来るのか?」について、意見が活発に交わされた。

古田町マリア教会の富山聖くん(高一)は、「理性で神の存在を知り、もっと

深くキリスト教に関わっていききたい」と今後の学習に意欲を。同教会の栗栖宏行

司祭評議会とコンベンツ

▼司祭評議会

9月18日(月)、教区本部で司祭評議会が行われ、信仰の伝達と班制度の生かし方をテーマにした昨年の教区評議会での意見を振り返った。その中から班制度から委員会制度に変える必要があるとの意見を取り上げ、改めて班についての理解を確認した。班は信者すべてを対象にしていること

くん(高一)は、「(神を)理性で信仰するのではなく、感じる大切と再認識できた」と喜んだ。名瀬聖心教会の村田優之くん(高一)は、「参加する仲間が増えてほしい。有意義な時間になると思う」と話した。

▼コンベンツ

9月19日(火)、教区本部で司教協議会社会司教委員会主催の「出前研修」とコンベンツが行われた。

司教執務室便り

中国の教会に思う



玉里教会時代、信者の皆さんと湖南省を訪れて以来二度目となる中国訪問は第42回MEAアジア会議出席のためでした。会場は、上海から車で二時間ほど北に行った南通(ナントン)市。人口730万の大きな町ですが、想像していたよりもずっと清潔でした。広い歩道には煙草の吸殻一つ落ちていませんでした。それにバイクはすべて電気で無音。

ところで、会議の初日は地元教会でミサを捧げ、ミサの終わりに12か国を束ねるアジア代表が一週間にわたる会議の開会宣言をするのが習わしで、今回は、町はずれの海門(ハイメン)教区のカテドラルでした。ちなみに、アジア代表の夫婦は昨年選出された日本代表夫婦でなんと誇らしい感じがしました。そんな中国の教会の様子を少しだけ紹介したいと思います。

環境汚染から食べ物のごままでいろいろな意味で中国と言えば、日本人には否定的な感情が強いようですが、教会の場合も例外

「出前研修」とは社会司教委員会が、現代の社会問題に関してカトリックがどのように受け止め、人々に呼びかけているかを司祭、修道者を対象に説明しているもので、鹿児島教区ではコンベンツの機会に、今回は原発問題についてのカトリック教会の見解を学んだ。

講師は、社会司教委員会委員の光延一郎神父(イエズス会)。同神父は、昨年司教協議会が出した『今こそ原発の廃止を—日本カトリック教会の問いかけ—』編纂委員会の代表。講話の中で、政治家は、具体的な案件に賛成、反対して状況を

ではありません。しかし、政治的に複雑な状況に置かれているからといって、信者たちにはある意味関係のないことです。実際に、一緒にミサを捧げても全く違和感はなく、むしろ鹿児島よりも元気いっぱい、ミサに感動しました。また、ミサ後外に出ると、何人もの人から祝福を乞われました。しかも、跪いて祝福を願う姿を日本では見たことがありません。

10日の日曜日のミサを捧げたのは、鹿児島と同じザビエル様に捧げられた蘇州教区のカテドラルでした。2013年に完成した美しい教会でした。上海にも近いのでいつか教区主催の巡礼を計画できたらいいと思います。MEの活動は政府公認で大変信頼されているので、MEの仲間たちと連絡を取り合って実現できたらと思います。

かつて、毎年のように中国教会との交流をしておられた白柳枢機卿が「中国の教会を大事にしてください。パチカンへのあこがれは大きいものがあります」と話されたことが思い起こされます。そう言えば、ハイメン教区カテドラルの庭先には教皇の顔写真入りの横断幕が掲げられていました。キリストの兄弟姉妹としてさまざまな思惑を超えて仲良くできたらと思いました。

会と催し (10月)

- 1日(日) 年間第26主日
- 3日(火) 終身助祭候補者認定式・9時・川内教会
- 3日(火) 大松正弘神父霊名(聖ジェラルド)
- 4日(水) 朴 昶奎神父霊名(聖フランシスコ)
- 5日(木) 牧山田一神父叙階記念(1961年)
- 5日(木) 聖体礼拝・カテドラル・6時30分
- ▼デクルス神父命日(1980年)
- 8日(日) 年間第27主日
- 10日(火) 福岡英雄神父叙階記念(1989年)
- 12日(木) アッシュヤー神父霊名(聖マックス)
- 15日(日) 年間第28主日
- 16日(月) レデンプトール例会
- 17日(火) 教区巡礼委員会・教区本部・19時
- 22日(日) 年間第29主日
- ▼世界宣教の日(献金)

世界にはまだキリストを知らない人がたくさんいます。日本でもわたしたちはキリストを知らない人たちに囲まれて生きています。キリストを伝えることである宣教は、神の子ども、キリストの弟子となったわたしたち皆に与えられている使命です。

「世界宣教の日」は、すべての人に宣教の心と呼び起こさせること、世界の福音化のために、霊的物的援助をはじめ宣教者たちの交流を各国の教会間で推進することを目的としています。この日の献金は、各国からローマ教皇庁に集められ、世界中の宣教地に援助金として送られます。日本の教会は、いまだに海外から多くの援助を受けていますが、経済的に恵まれない国々の宣教活動をさらに支援できるように成長していきたいものです。

▼オリブの会・教区本部・14時

24日(火) 大水如安神父命日(1994年)

28日(土) 聖シモン・聖ユダ使徒

29日(日) 年間第30主日

31日(火) ミタマヤ神父命日(1984年)

祈りの意向

【祈祷の使徒会】

世界共通 働く人たちと失業している人たちの日本の教会 諸宗教の貢献

福者レオ税所七右衛門殉教祭

日時：11月3日(金) 11時集合
場所：京泊天主堂跡
集合：京泊天主堂駐車場(薩摩川内市港町6232)
内容：11時40分巡礼行列 12時20分殉教記念ミサ

小教区の枠を超えて交流

教区連合壮年会が奉仕作業と黙想会

鹿児島教区連合壮年会(長 秀樹会長)は9月9(土)日と10日(日)、溝辺のマリア山荘で、黙想会を行った。美化清掃作業や講話などのプログラムを通して、参加者はそれぞれの信仰を深めるとともに、小

教区の枠を超えたつながりを喜んだ。連合壮年会黙想会は、小教区の枠を超えたつながりのなか、各自の信仰を深めること、各小教区の課題、各小教区に限らない共通の問題などについて語り合うことを目的とする。久しく企画されなかったが今回、十数年ぶりに実施された。

初日の9日、参加者は溝辺のマリア山荘に集合。まず2時間余り、美化清掃作業として、草刈り、樹木の伐採、外壁の洗浄などを行った。講話では、貴島丈弥神父(ザビエル教会助任)が「つながり」をテーマに、司祭叙階までの道のりを披露。幾度もの挫折

貴島神父の講話に聞き入る



に見舞われながらも、さまざまなつながりに助けられ、召命を確信するに至るまでを語った。夕食は中庭でバーベキュー。舌鼓を打ちつつ深夜まで、話題の尽きることはなかった。二日目の10日、朝食後に分かち合いが行われた。導入では連合壮年会顧問のアシ神父(始良教会主任)が、「これからも勉強会よ、今回のように指導者から生活体験等を聞き、分かち合うスタイルがよいと思う」と助言した。分かち合いのテーマは、(1)教会内のつながりについて、(2)教会外(とくに社会)とのつながりについての二つ。テーマごとにグループに分かれ、参加者はそれぞれの思うところを語った。

分かち合いの後は溝辺教会のミサに参列。全日程を終え、解散した。今回は、谷山、吉野、玉里などから壮年7人のほかに、神学生1人、司祭2人が参加。世話役を務めた山下和美さん(紫原)は、「十数年ぶりに、小教区の枠を超えて、語り合う機会が得られて嬉しい。これからの、課題克服の出発点としたい」と話した。

と子ども食堂

ご寄付は下記の口座にお願いいたします。
 ☆ゆうちょ銀行：と子ども食堂
 店名 七八八 店番 788
 普通預金 口座番号 3225173
 ☆鹿児島銀行：と子ども食堂
 県庁支店 普通預金 3019349

短歌 (文芸)

朝の陽が一夜をかけて編みあげし蜘蛛の巣
 城虹の光を
 始良教会 川口 節子

テントより仰ぐ高原の夜の空に満ちたる星
 は神のたまもの
 鴨池教会 前田 儀子

き画集繰りゆく
 鹿児島純心 川上 和
 牧童に「ロザリオの聖母」と名のられし百年の歩みに「アヴェマリア」流るる
 青々と広がる田園風の波実る大地の糧に恵まれ

冷水をしのばせ歩く御ミサの道
 始良教会 川口 節子
 故郷の墓碑の名を呼ぶセミの夕暮れ
 鹿児島純心 川上 和

+KABAYAN SEKSYON+ Ang Presensya ni Kristo sa Eukaristiya

Ang matibay na pananampatalaya ng Simbahan ay nagsasaad na sa pagdiriwang ng Eukaristiya, ang tinapay at alak ay nagiging totoong Katawan at Dugo ni Hesukristo sa kapangyarihan ng Espiritu Santo.

Ang buong Kristo ay ganap na naroon, katawan, dugo, kaluluwa at pagiging Diyos, sa anyo ng tinapay at alak. Ito ang magandang katuruan ng Simbahan ukol sa tunay o totoong presensya ni Kristo sa Eukaristiya.

Sinasalamin ng pananampatalaya ng Simbahan ang mga salita ni Hesus sa mga Ebanghelyo: "Ito ang aking katawan na ibinibigay dahil sa inyo" (Lc 22:19). "Ako siyang tinapay na buhay, na pumanaog mula sa Langit...At ang laman ko ang tinapay na aking ibibigay alang-alang sa ikabubuhay ng mundo" (Jn 6:51).

Para sa mga Katoliko, ang tinapay at alak na napanibago at naging banal ay ang totoong Katawan at Dugo ni Kristo at hindi mga simbolo lamang.

Ang tunay na presensya ni Kristo ay nananatili, kahit matapos na ang Misa; dahil dito maingat na binabantayan ng Simbahan ang "sagradong ostiya" sa mga tabernakulo.

Nagdiriwang din ang Simbahan ng mga Kongresong Eukaristiko, nagtataguyod sa personal na pagdalaw kay Kristo sa Banal na Sakramento pati ang Benediksiyon, mga prusisyon ng Eukaristiya, at pagdadala ng Banal na Ostiya sa mga maysakit at may kapansanan.

Sa tuwing nakikiisa tayo sa Banal na Piging o Banal na Eukaristiya at tinatanggap natin sa komunion ang Katawan at Dugo ni Kristo, si Kristo ay nakikiisa rin sa atin. Nagiging bahagi ng ating buhay si Kristo. At dahil diyan, binibigyan tayo niya ng sapat na lakas para makapagpatuloy ng paglalakbay sa araw-araw. Nagiging lakas natin siya sa pang-araw-araw nating buhay. Kaya huwag natin sayangin ang pagkakataon na palaging matanggap natin ang Katawan at Dugo ni Kristo sa Banal na Eukaristiya.

Katesismo sa Taon ng Habag (Fr. Dino Orolfo)

ザビエル書院の窓

2018年手帳・カレンダー

ドン・ボスコ社製のカトリック手帳(大判・ポケット版)やマンスリープラン、カレンダー等が入荷いたしました。お早めにお求めください。

新書紹介

ドン・ボスコ社の

「聖書とわたし」

定価1,400+税



お子さんと一緒に
 すべての人を救おうとする神の愛を
 学びましょう。

KJP (鹿児島正義と平和協議会) 通信 10月号

奄美大島に於けるカトリック迫害の歴史(1) 大島高女廃校運動のミッシェル大島高等女学校が開校したのは1924(大正13)年。本格的な教育機関を」と、地元有志の要望を受けて、カナダ・フランシスコ会が設立した。開校2年後に現在

の奄美高校の場所にコンクリート造りの建坪600のモダンな校舎が完成。英語は主にカナダから来たシスターが教えた。自由でのびのびとした学校であったが、1928(昭和3)年ごろから「大島高女は非国民的な教育をする」という声が出始める。1930(昭和5)年春、名瀬町の有志と大島郡内の全町村長名で、大島高女を非難する上申書が鹿児島県などに提出された。理由としては、①開校時に、カリスト・ジェリナ校長は教育勅語を奉読しなかった。②高千穂神社の大祭に大島高女は一度も参拝しない。③伊勢神宮遷宮祭で各

学校は遥拝式を行うようにという県の通達を無視した、ことなどである。1933(昭和8)年4月、大島高女に対する周囲の風当たりが強まり、「大島高女寄宿舎の天井裏には、スパイが戦争準備のために銃や火薬類を隠してある」という噂が流れた。当時、「カトリック教徒はスパイ」という根も葉もない噂を呼ぶのに新聞報道が役割も二役も買っていた。1933(昭和8)年8月25日夜、名瀬小学校校庭で、大島高女の廃校を求め第一回町民大会が開かれ、神社不参拝や遥拝式拒否等の問題を新聞記者らが訴えて、「大島高女は国体

に反した教育をしている」と廃校を決議。翌日、名瀬町議会に賛同するよう文書で申し入れた。名瀬町議会は同年9月7日、臨時議会を開催。廃校を求める決議案は賛成多数で可決。賛成に起立しなかったのは唯一のカトリック信者久保喜助町議だけであった。その夜、名瀬小学校で議会報告を兼ねた二回目の町民大会が開かれた。参加者は1回目の5千5百人よりさらに多かったという。

名瀬町議会の町長(議長も兼任)ら3議員は、鹿児島県学務課に行ったが、「文部省が認可した学校だから」と打ちあがかなかつた。文部省に行っても取り合ってくれなかつた。陸軍省企画部に向くと、陸軍大臣から「来年3月末には諸君の目的を遂げられるよう取り計らう」との返事をもらつた。1934(昭和9)年3月、大島高女には同校廃止の指令が下り、開校から10年間で廃校に追い込まれた。大島高女廃校後、奄美のカトリック教徒に対する迫害はますます激しくなつた。(指宿教会・永井勲 続く)

定例会の案内

(毎月第三土曜日)
 日時…10月21日(土) 13時~15時
 場所…教区本部
 内容…①主の祈り ②情報交換 ③奄美でのカトリック排撃運動